

第20回環境コミュニケーション大賞 環境報告書部門 講評

- 日 時：平成29年2月22日（水）14時30分～15時05分
- 場 所：グランドプリンスホテル新高輪3階宴会場「天平」
- 講評者：環境報告書部門選考ワーキンググループ座長 後藤敏彦氏
（環境監査研究会代表幹事・GRIスタンダードピアレビューアー）
環境報告書部門選考ワーキンググループ副座長 村上智美氏
（みずほ情報総研株式会社シニアコンサルタント）



1.はじめに

○村上委員

2015年度、この場で「近年、環境コミュニケーションの世界では、大きな転換期を迎えています」とお伝えしましたが、このトレンドはまだ続いているように感じます。

2016年10月にGRIスタンダードが発表されましたが、「スタンダード」と称することからも、そうした指針の目指す位置づけ、あるいは重要性が変化している動きの一端を見ることができると思います。また、12月には「金融安定理事会（FSB）の気候変動関連の財務情報開示に関するタスクフォース（TCFD）」が、「気候変動関連財務情報開示」に関する最終報告書案を発表し、先日、パブリックコメントの募集が終了しました。金融安定においても気候変動は留意すべき事項であること、また、その中の情報開示の重要性が明確に示されたものだと思います。

その他にも、2015年に採択された持続可能な開発目標（SDGs）やパリ協定に関連する事項、国内でESGを含めた投資家と企業との対話など、報告書・コミュニケーションのご担当者の対応すべき事項の幅はますます広がり、めまぐるしい変化の時代になっていると感じます。

2.過去20年の環境コミュニケーションの変遷

○後藤委員

第1回目の環境コミュニケーション大賞から関わりながら、皆様の環境報告書を拝読してきましたが、この20年において、環境コミュニケーションは4つのフェーズに分かれて発展してきたと思います。

1つ目が「環境情報の過去情報を中心としたレポート」が行なわれていたフェーズです。排水や廃棄物などをどのように減らしたかなどを中心とした内容が記載されていました。

2つ目が「環境だけではなくCSR情報のレポート」が行なわれていたフェーズです。2002年ごろにかなりの企業の報告書が、CSR報告書へとシフトした印象があります。

3つ目が「情報の網羅性重視からマテリアリティ重視に変わった」フェーズです。2006年にGRIが第3版を出したあたりから、マテリアリティ、重要性を重視する傾向となりました。

そして4つ目が「将来動向やESG情報に重要性が移行した」フェーズです。これがここ数年で大きく変化した部分であり、今後の環境に関する情報開示において重要な要素になってくるかと思っています。

第 20 回環境コミュニケーション大賞

環境報告書部門 講評

3. 第 20 回環境コミュニケーション大賞のトレンド

○後藤委員

2016 年度の環境コミュニケーション大賞の大きな特徴の一つとして、第三者審査を受けている報告書の数が大きく増加したことが挙げられます。

近年、環境コミュニケーション大賞審査の際に、環境報告書として優れているもののうち第三者審査を受けている作品を、協賛団体である「サステナビリティ情報審査協会」にテクニカルレビューを依頼しています。このレビューの依頼件数が、第 18 回が 13 件、第 19 回が 17 件、第 20 回が 27 件と、年を追うごとに増加の傾向が見られます。このことから、優秀な報告書のうち、第三者審査を受けている報告書の割合が増加しているのではないかと考えられます。

この背景には、ESG 投資が進む中で、情報の信頼性を高めなければならないようになってきていることが挙げられます。欧州において非財務情報開示は財務情報の開示に伴うものであり、監査がつくことが前提となっています。しかし日本の場合、非財務情報は任意開示なので、欧米の投資家からみると、特に社会性の情報開示の点において非常に低く見られがちです。このような状況の中で第三者審査の増加の傾向が見られるのはすばらしいことだと思います。

○村上委員

マテリアリティの特定の記載も増えてきており、それを踏まえ、経営層のコミットメントに環境、あるいは社会課題認識を明確に記載している企業や、長期目標・ビジョンを含む価値創造のビジネスモデルを一定程度記載し、中長期的な戦略や方向性を記載している企業が着実に増えてきていると感じました。また、SDGs との関係性を表現した記載も増えました。

その一方で、必要項目を満たすように、形式的な内容の報告書となってしまっている企業も出てきています。マテリアリティの特定、価値創造に向けたビジネスモデルについての内容を盛り込んでいても、掘り下げ方が将来的な持続性・成長性に関するストーリーを読み解くのに不十分であるケースも見受けられました。冒頭でこのような記載をされていても、経営・事業との連動性が読み込みづらかったり、後の報告ページで企業としての方向性を着実に具体化し、進めていることを具体的に表現した内容が不足していたりするなど、物足りなさを感じることもありました。

まだまだ、新たなフェーズの報告書への対応過程、つまり「統合思考化」を進めている過程である企業もおありなのが現状だと思われます。

4. 情報開示の手法

○村上委員

長期の環境と経営を関連付けた方向性は読み取れるにしても、形式だけ「統合報告」的で、コンパクトな報告書となっており、また、そうしたコンパクトな報告書のみを応募資料として提出されている企業も一定程度ありました。結果として、将来に向けた方向性の実現について応募資料からは確認することができないケースも見られました。

統合報告は投資家等にとって、企業の中長期的な価値創造と統合思考の状況を理解するうえで非常に有用です。しかし、記載に有用と言われるパーツを断片的に作って寄せ集めれば完成するものではありませんし、企業が行う情報開示、コミュニケーション全体を考えた場合には、それだけで十分なものでもありません。

別途 WEB 上で、より具体的な情報をご紹介いただいている企業もあるかと思いますが、その情報への誘導ができていなかったり、できていたとしてもその情報が散漫で、全体構成がわかりづらかったりした場面も見受けられました。

媒体が多様化していく中、審査のみならず、様々なステークホルダーとのコミュニケーションにおける多様なニーズに対し、どのような媒体を活用し組み合わせて、いかに効率的に情報を提供していくか、ユーザビリティという面でも企業と読み手で対話をし、改善していく余地があると感じた次第です。

環境コミュニケーション大賞への応募においても、審査員に見て、評価してほしい部分が明確に提示できているかという視点で、今一度応募要領も確認しつつ、ご応募いただけるとよいと思いました。

第20回環境コミュニケーション大賞

環境報告書部門 講評

○後藤委員

統合報告について、日本では誤解がまだ多くみられます。アニュアルレポートと CSR レポートを前提として、要素や項目を組み合わせるだけの報告書ではなく、統合した会社としてのストーリーを書いてもらうことが重要です。ストーリー性が薄くなってしまうと、ESG 投資の観点からも評価がされなくなってしまいます。ですので、統合報告書は、エグゼクティブサマリー（統合報告）とするのはどうか、と考えています。

5. 環境コミュニケーションの今後の動向

○後藤委員

GRI スタンダードにつきましては、4 月には日本語訳を提供できるようになると思います。

今回、「スタンダード」となった背景には、EU の指令により、EU 域内で原則 500 人超の企業に「環境」「人権」「労働」「腐敗防止」の 4 つについて、原則主義での開示が義務化されたことがあり、この原則に合うようにしてスタンダード化されたと考えています。

国内では、環境報告ガイドラインの改定を来年度環境省で行う予定です。この数年の環境報告は激変しており、2012 年版のガイドラインは、現在の方向性や現状と整合性が保たれていないのが実情です。そこで、どのような方向性で改定するかを骨子を決める会議が環境省で行われておりまして、私も委員の一人となり、現在検討が進められています。

大きな方向性としましては、世界の大きな動きを取り込み、日本の環境報告をガラパゴス化させない内容へと改正される予定です。中堅・中小企業が書きやすく、大企業にもコア情報として役立つもの、また中長期ビジョンを重視したガイドラインとなる予定です。

○村上委員

読み手が「わくわくする報告書」がどのようなものなのかを改めて考えてみますと、事業戦略にも及んだ各環境・社会課題への中長期的な対応が、KPI、あるいはガバナンスやマネジメントアプローチと十分連動し、実効性が担保され、企業が自社と社会の持続性を目指して取り組んでいることが読み取れる、つまり、企業の本気度が伝わる報告書ではないかと思っています。

それは、経営層と経営企画や IR、環境、CSR 関連組織、事業部、現場の従業員が、どれだけ環境対応も含めた中長期のリスク・機会、それへの対応戦略であるビジョン・目標を共有できているか、投資家をはじめとしたステークホルダーに伝えようとしているかの表れだと思っています。

私も企業の方々から相談を受ける際には留意しているのですが、レポーティングあるいはビジョン策定の機会を、ぜひ社内組織の認識の共有や連携強化の機会、つまり統合思考化を進める機会として捉えていただけたらと思います。策定段階からいろいろ工夫するなどして、企業の経営を含む様々な改善に努め、よりよいレポーティングができるように取り組んでいただけたらと考えています。

以上